

# 唐



# 津

## 1. Connecting Places that Have Maintained Strength

### ～多様な空間資源・場の結合～

メンバー：Ibrahim Zakaria Bahreldin, Manami Fujiwara, Eduardo Guerrero, Ishihara Masaya, Anna Robinson, Tripti Sharma, Xiangwang Meng

アーバンデザインの戦略としては、繋げる必要のある場所だけを繋げる事が可能だと言うことです。唐津には、唐津城、唐津神社、旧唐津銀行、歴史的城壁、京町、呉服町、御茶苑窯のような通りのように歴史的にも文化的にも重要な場所があり、町田川、松浦川、西の浜海岸や周囲の山々といった自然もあります。これらは、機能的、視覚的、あるいは、精神的な意味合いなど明確な意図をもっては繋がっていません。これらの要素を強固に繋げ、また自然系への直結させることは、唐津市民や訪問者に、より良いアクセス、読みやすさ、およびオリエンテーションを提供する。

私たちの提案は、これらの特徴をさらに強化するために、新しいリンク（場所をつなぐ）するだけでなく、唐津にある既存するリンク（通りや道路）を接続させます。私達は、都市が相関関係にある（物理的で視覚的）な実存により関連つけられ、象徴的（文化的で精神的）に繋がっていると思います。

接続によって支持される相互関係の統合システムであるとみなします。地域的スケールの視点に立てば、私たちの戦略は、自然環境との関係を明確化することを目指します。市全体のスケールでは、私たちは、複合的で精神的な拠り所を持ちながら、街区ごとの関係性を強化します。都心的スケールに立てば、特に、以下の3つの街区：城の地区、神社地区、および商人地区を重点的に計画します。

私たちの戦略は、歩行者にとって、連続する空間を経験するように、街路や主要な交差点に沿って仕掛けをします。インフィル（埋め込み）型の開発は、リズムカルに連続するファサードを作り、街区の角を明確にするなどの点で、良く用いられます。また、山や川、海への眺望を保持するためのビューコリドーを確保するうえでも有用です。これらの戦略の実現は、長い歴史の中で、維持されてきた唐津らしさを再統合します。

# 唐



# 津

## 2. Strengthening the Living Heritage

### ～「歴史」と共に生きる街の創造～

メンバー：Lopamudra Neog, Shравan Kumar N., Mao Miao, Hiroki Muto, Erina Ishigami, Daniel Miller, Brenda Snyder

唐津に住む人は、豊富な文化的、伝統的資源を受け継いできましたが、今日、その多くが見過ごされ、心ない開発などにより失われつつあります。唐津に現存する文化財を尊重し、その魅力を引き出すために、私たちは断片的に存在するそれらの資源を再編集し、新たな価値を与えるような統括的なビジョンを提案します。先祖から受け継がれてきた歴史的建造物が、文化的、社会的価値として認識された時、また、長い歴史の積み重ねの中で培われてきた生活そのものが、文化財として今の唐津に息づいています。これらの文化財は唐津らしさを醸し出し、伝統の積み重ねの中で唐津人としての誇りを代々にわたり植え付けていきます。

歴史的にも唐津は国際的および地域的交易で栄えた町です。今日の唐津にもその片鱗は見出せます。地域間の経済的、文化的交流を興すことで、文化的な慣例や習慣を生み出し、あるいは維持できると考えます。これらを合わせれば、あらゆる世代のひとびとのつながりと交流が、個人レベルでもコミュニティレベルでも生まれてくることでしょう。唐津の歴史的建造物と空間を戦略的に再利用することで、社会的な活動、唐津らしさ、帰属意識の向上を促進し、やがては特徴ある唐津の中心市街地の再生へつながっていくものと信じています。

唐津の町は城壁によりまちが形成されています。私たちは、西側の城壁沿いを歩き、物理的にも精神的にも重要な遊歩道としてデザインしました。城内エリアでは、街路内の空き地を利用し、市民果樹園や市民菜園といったコミュニティ施設を設置し、歩けるようにしました。その結果、歩いていくことで文化的な財産とコミュニティの拠点がつながっていきます。最後に、かつて盛んだった海外や地域間の交易で栄えた地域の特産物や民芸品の復興の支援ができるよう、市役所と唐津神社を結ぶ大通りを唐津の経済的なシンボルとしてデザインしました。

# 唐



# 津

### 3. Karatsu as an Eco-Walkable City

#### ～人に優しく歩きたくなる環境の再生～

唐津のまちなかを歩いていると、まるでギャラリーの様に歴史的建造物、豊かな自然、文化的資源に出会うことができます。住民も観光客も、まちを歩けば城下町唐津を感じ、海と山の自然が近いことに驚き、唐津焼や神社などわびさびを感じさせてくれる場があちこちに存在していることに気がきます。また、歩くということ、それ自体が刺激的で楽しい体験です。興味深い景色を眺め、いろいろな人に出会い、ふれあい、居心地のよいちょっとした休憩所で息つきながらまちを歩けば、日常生活も退屈なものではなく、楽しいものになっていくでしょう。50年後の唐津は車で移動する代わりに、歩いたり、自転車に乗ったり、公共交通で移動したりする“歩きやすいエコシティ”になって欲しいと私たちは願っています。自然資源は保護され、中心部も歩きやすい地元の商店街として生き生きと活動する持続的な生活のできるまちとして再生されていくのです。そのためには歩行者に重点を置いた積極的な戦略が必要となります。歩行者中心のまちづくりデザイン、将来のありべき姿へ向けて私たちは提案していきたいと考えています。

#### 快適な歩行環境を作り出す

歩いて楽しいまちをつくるための具体的な戦略は以下の通りです。

- ・冬の冷たい風から歩行者を守り、夏の日差しを防ぐ陰を創出する。
- ・長い距離でも楽しんで歩けるよう、好ましい景色とお休み処を点在させる。
- ・歩行者のスケールにあった街路空間を創出する。(建物の高さや道の幅を調整し、心地よく囲まれた街路空間を創出する。)
- ・地下道を廃止し、地上を歩行者優先の空間とする。

#### 4つの歩行者ネットワーク

日常、歩行者がどのようにまちを歩いているかを理解するため、私たちは地域住民の方々に話を聞きました。その結果、日常生活において、おもに4つの歩行者行動パターンがあることに気がきました。その4つの歩行者のパターンとは、学生、働いているあるいは買い物をしている一般の住民、お年寄り、そして観光客です。これらの歩行者のルートに対して快適に歩けるようなデザインを提案します。

#### 結論

私たちの提案は、今の歩行者に対して配慮の少ない、車優先のネットワークに対しての挑戦です。歩行者の新たなつながりを促し、歩く権利を復活させるデザインは、郊外から街の中心部への人の流れをつくる、新たな唐津のネットワークとして機能するでしょう。

日本建築学会  
国際建築都市デザインワークショップ  
唐津2010

# 唐



# 津

## 4. A Sense of Arrival

### ～アプローチ景観と場の演出～

メンバー：Sudeept Maiti | Jeff Ream | Ebrahim Hassibi | Masamitsu Tanikawa | Mayo Sonetaka | Wataru Ikeda | Seul-a Kang

唐津の街から、豊かな文化や地形的特徴が失われました。これは、空間における都市の精神とその顕現における断絶のように見えます。継続性の欠如、包囲性の喪失、特徴の喪失、貧弱な方向性、および強烈な場所性は、到達感を威圧しています。

触媒作用をもつデザイン介入は、以下を通して試みられます。

- ・統一された土地固有な目的地へのネットワーク
- ・視覚的かつ文化的な方向性
- ・歩行者優先の公共空間

到着へのネットワークは、4つの触媒作用をもつデザイン介入から成ります。

#### 目的地への道中

- ・目的地、到達点への通り沿い、街道沿いに唐津市の特徴を強調する。
- ・計画的に設置された立体駐車場によるパーク・アンド・ウォーク戦略。

#### バス・ターミナル

- ・新しい文化的中心としてのバス・ターミナル、曳山展示場、相互作用のある唐津焼ギャラリー、情報など満載の焼き物美術館。
- ・空間的、ランドスケープ的な要素により歴史的な掘割の配列、城郭都市への進入を重点化する。
- ・唐津市の中心部に公共空間を作り出す。バスセンターを南にあるの商店街と北にある旧武家屋敷街を繋げる交通の要衝とする。

#### 駅前広場

- ・中心部の北と南の地区を繋げる。
- ・自動車と歩行者を南北軸上に誘導する。
- ・最終目的地への到達感を感じさせる雰囲気ある中心的場所を作る。

#### 水辺の城下町

- ・旅行者向けの複合機能の通りや、中心住宅地を作り水辺に面する活気のあるオープンスペースを作る。
- ・アジア諸国に対する玄関、炭鉱の積出港としての歴史的背景に焦点を絞った唐津歴史博物館を作る。
- ・アクセス道である唐津通り（国道204号）と唐津城を強力な軸線で結び付ける。

日本建築学会  
国際建築都市デザインワークショップ  
唐津2010

# 唐



# 津

## 5. Densifying and Revitalizing Karatsu's Urban Core

### ～伝統的町割りを活かした高密度居住の形成～

メンバー：Sebastian, Simona, Bojan, Mayumi, Hiroki, So, Yogesh, Cliff

私たちは、唐津市の中心市街地の活性化と市街地の居住人口に対して検討を行いました。市街地の居住人口は継続して減少し続けています。その影響で一部の建物は取り壊され、空き地となった敷地が駐車場で利用されることとなり、結果として市街地の景観や土地利用形態が大きく変化してきています。

城下町として築かれた市街地の骨格は現在でも受け継がれており、お屋敷街の緑豊かな街区、商店街の建物が密集した街区として現れてきています。この相対する二つの街区に新しい唐津での生活を提案する空間計画を都市デザインを通じて行うことができる可能性を見出しました。ここで提案される新しいライフスタイルは、唐津に生き、唐津を感じる、唐津市の文化資産となりうるでしょう。

具体的には、私たちはこれら市街地内部の空間に可能性を見出し、特に駐車場として利用されている敷地に対して、新しい居住のためのよりよい使い方ができるのではないかと考えました。豊かで新しい居住環境を創造し、市街地の人口増加へつなげていくことが私たちの目標です。

以下は私たちの提案です。

第一段階：まず街区内部（アンコ）に建物を建設・配置し、新しい広場や小道を形成します。これにより作られた新しい居住環境がもととなり、第二段階へと進展していきます。

第二段階：内部が新しい居住環境として整備されると、次に、街区のガワ（道路沿いの街路の外側の部分）に建っている建物や店舗のファサードがきれいに改修され、これらの建物の内部も改装されていき、街並みの景観が修復されていきます。

第三段階：街区のアンコへの新しい居住空間の創出、ガワの建物の修復が完了すると、多様なライフスタイルを持つ人々が住むようになり、さまざまなプログラムが共存した街区が創出され、中心市街地の活性化へとつながっていきます。最終的には、この新たな市街地居住環境を維持していくために、建物の大きさやデザインに対してガイドラインやルールづくりを行っていきます。

日本建築学会  
国際建築都市デザインワークショップ  
唐津2010

# 唐



# 津

## 6. Imagining an Eco-Friendly City at the intersection of River and Sea

### ～生態系システムの育成～

キーワード: 都市環境システムの保全、都市緑化の広がり、コミュニティの橋渡

唐津市は、町田川と全長 45.3 km と佐賀県で 2 番目に長い松浦川の河口に栄えた。本来、城を守る防御の役割を担っていた掘割が、この街の骨格を形成した。天然の良港である唐津は、中国や韓国との貿易を盛んにし、富や文化をこの地にもたらしました。水により形成されたということは、水系が再びに唐津市をサステナブル（持続可能）でエコロジカル（生態的）な方法で本来の活発な繁栄を取り戻す最重要な要素と言えます。

まず第一に、注意を払いながらも、徐々に、松浦川の上流に建設された河口堰によって堰き止められた水を放出することです。そうすれば、河口堰の建設以前の水系を取り戻すことができます。ラグーン（塩湖）の水系には、もともとそこに生息した動物相や植物相が徐々に再生し、元来の姿に戻った町田川は、緑、鳥、魚を都市にもたらし、景観の大切さを再認識させ、地域住民に新しい交流の場を提供します。と同時に、もう一つの戦略は、雨水はもはや雨水管により河川へ直結されるのではなく、緑の軌跡をつくりなが、地上の低湿地を伝いながら川に辿り着きます。

結果として都市と塩湖に広がるグリーン・ネットワークは、生態系保全の実践において唐津市の独自性を強調し、訪問者におそらく、早稲田大学の支援のもと生態系の研究センターとしての位置づけを明確にします。この提案は、都心部に住む高齢者が低湿地や川沿いの休閑地を利用した小さな都市農園を活用し、昼や夜に隣接するミニ・マーケットや屋台で即売するという具合に、コミュニティ同士のつながりを強化し、都市を活性化させる様々な仕組みからなります。

川を再生させることは、都市景観を美化させること以上に、バランスにとれた環境システムを構築します。水は経済的後退から都市を保護し、世界は持続可能で、緑豊かな、住みよい都市へと再編集します。この提案は、はじめは非実用的に見えるかもしれませんが、確かに、長い時間が必要です、しかし、今始めなければならぬのです。私たちは、したがって、各住戸というマイクロな単位での雨水と中水の分離、各コミュニティでは家/店の間の保有池の確保、次に、都市的スケール、地域的スケールに拡張していく形で、実践していくことを推薦します。

日本建築学会  
国際建築都市デザインワークショップ  
唐津2010